

日本現代文
全集
98

椎名麟三
梅崎春生
集

日本現代文學全集 98

椎名麟三
梅崎春生
集

講談社

日本現代文學全集

98

椎名麟三・梅崎春生集

編 集
伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



初版 第1刷
昭和40年3月19日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著 者 椎 名 麟 三
梅 崎 春 生

装 幀 蟹 江 征 治

發 行 者 野 間 省 一

發 行 所 株式會社 講 談 社

印 刷 大日本印刷株式會社
製 本 株式會社 堅 省 堂

東京都文京區音羽 2-12-21

郵 便 番 號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振 替 東 京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-106988-2253 (2)

(女1)

椎名麟三集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

流れの上に……………五

深夜の酒宴……………一〇

邂逅……………三

自由の彼方で……………二六

群衆のなかの顔……………一五

スタヴローギンの現代性……………二〇

作品解説……………本多秋五 三〇

椎名麟三入門……………荒 正人 三二

年 譜……………三九

参考文献……………四三

梅崎春生集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

風 宴	二〇七
櫻 島	二三
日の果て	二四
空の下	二五
記 憶	二六
狂い風	二七

私はみた	二七
------	----

天皇制について	二八
---------	----

作品解説	本多秋五 二九
------	---------

梅崎春生入門	荒 正人 三〇
--------	---------

年 譜	四〇
-----	----

参考文献	四四
------	----

椎名麟三集

言葉の命は
人の光である

椎名麟三

流れの上に

夕方、わずかに狭い通りを隔てただけの隣の建物の窓が落日を映して眞紅に輝きはじめると、私はふと吐息をついて書類から顔を上げ、窓の外遠く大空を見やりながら、空中の郷愁を帯びたある一音をとらえようとするのだった。その音は、鐵橋を渡る省線の轟音や車臺の部分品をがらがら打ち鳴らしながら兩國橋から逆落しに降りて来る市電の怯えたような警笛や驛へ蟬集しては散つて行くトラックのものの狂わしいエンジンエンジンの響の彼方から、オルガンの低い一音となつて私の心のなかに落ちて来るのだった。その音は不思議なほど、生の追憶や運命への漠とした豫感にも似たある情緒にあふれてゐるのだった。だがその音が間もなく空中へ餘韻の尾をひきながら消えて行くと、それが兩國橋へ向う最終の隅田川機船の汽笛であることを知つてゐる私は、書類を片附けオーバーを着込んで歸る支度をはじめるのだった。

しかし私は誰にさよならを云えばよかつたであらう。この事務所のなかを支配してゐるものは忘却の静けさであつた。部屋の隅の壁へ押しつけられてゐる私の机だけにわずかに生氣があるばかりで、他の四つの机は、いずれも一月餘り前から埃をかぶつたまま白々と部屋の底に沈んでゐるのだった。この四つの机には四人の小工場主たちがそれぞれ座を占めながら、お互の利益に結ばれて合資會社を組織してゐたのだった。彼等はそこで聲高に笑い合い、儲話に熱中し、いたるところへ電話をかけ、そしてお互の愚痴をならべ立てて

いたのだった。だが彼はひとりになると、この事務所のただひとりの事務員である私を思い出し、私をとらえては仲間の誰彼への不快を打明けるのだつた。そしてそのときにその不快が憎惡にまで高まると、憎惡の重苦しい壓力に堪え切れないで私のひよわい胸までも借りうとし、私をどこかへ連れ出すのだつた。肺患の文字通りひよわい胸をもつてゐる私は、彼等のためにどんな事が出来たであらう。だがある日一人は他に新しい利益を見つけて姿を消し、またある日一人はこの會社が餘り儲からなくなつたという理由で出て來なくなり、遂には私ひとりとなつてしまつたのだつた。だが私はこの會社の使用人なのだ。會社があり辭職が許されないかぎりは出て來なければならぬのだつた。今の私は役所から種々な調査の命令が來るたびにこの會社の過去帳をひろげ、今は單なる虚無でしかないいろいろな言葉を拾ひ出して來るのだつた。しかし彼等はこの虚無でしかない言葉からときどきどんなに大きな利益を引出したであらう！ 實績という言葉一つからさえも！ こうして私は誰と口を利く機會もなく墓のような寒い埃つばい事務所のなかに一日中坐つてゐるのだつた。ただある日の二時十五分以來時を失つてしまつた電氣時計や机の上にあるペン皿の錆びついたペン先や書類棚の隅にあるこわれた花瓶などが、ふとしたときに私の胸に沁み渡つて來るのだつた。これらの象徴がこの會社の決定的な運命となる日も近いことであらう。私はこの豫感とともにいつも歸つて行くのだつた。靜に部屋を出ると墓所の番人にふさわしい一種の敬虔さをもつて東京××機械工業組合という金文字もけばけばしい扉を音も立てずに締め、しつかり鍵をおろして、その會社のあるべき場所へ、死のなかへ閉じこめながら。そうして私は忍びやかに三階からセメントの刻れた裏階段を降り、大抵はただひとりの乗客となつて兩國橋から引返して來る隅田川機船の最終に乘るのだつた。

最終の乗客は全く私ひとりきりのときが多かつた。河を通る船のうちねりを受けてゆるやかに揺る船着場にただひとり立ちつくしな

がら、兩國橋の方から引返して来る船を辛抱強く待つてゐるのだつた。風や雨の日には缺航し、初發から時間の出たらめなこの不便な乗物を、その不便さの故に私は愛してゐるのだつた。雲の動きとともに動き、日光と水との間に動いてゐるこの船には、生命との奇妙な暗合があつた。しかしこの船の航路は時代から限定に限定を重ねられ、今はやつと僅かの距離と頻度で存在してゐるに過ぎないのだつた。恐らくあの、次第に宇宙と相對的に縮小し遂には點となつてきりぎり舞ひをしながら消失してしまわなければならない數學的宇宙の人間と同じように、この航路も最後には點となり生活の彼方へ飛散してしまふのであらう。しかもこの航路が時代問題として取上げられるとすぐ限定を押すすめられ遂に無となるかも知れないといふことは、なんと精神に對する生命に類似してゐることだらう。だが私がこの船着場に着くころは、夕照が河面を見事な輝かしさに染めてゐるのだつた。それは眞紅のなかに眩い金色が揺れていて、私を忽ち莊嚴な感じで満すのだつた。やがて眩い金色はいつとなく消えて行き、遂には眞紅の血のような色だけとなり、それさえも夜の豫感のなかに消え失せてしまふと、やつと河面にはほの暗いたそがれが垂れ込めるのだつた。そのときになつても鵜たちはまだ飛んでゐるのだ。ときには、數十羽の鵜が最後の餘光のなかに小さな白鳥のようにほの白くうかんで流れた。だつてゐるときもあつた。またときには夕照とたわむれるように黒い影となつてそのなかへ落ちて行くこともあれば、その一羽二羽が何となしに私を見ながら私の傍をとおび過ぎて行くこともあつた。しかし鵜たちの眼は！その眼に私はときに羞恥を感じることさえもあるのだつた。飛んでゐる鵜は、頭部から背と胸にかけなだらかに肉付いてゐる線をすつかりあらわにし、しかもその羽毛は初々しい白さに輝いてゐるのだつた。だからうんでゐるうちにさえ見える黒い眼は一層黒く美しく見え、どこことなく動物的な暗さを持ちながら、それにもかかわらずひどく純潔な感じがし、その感じにふと壓倒されてときどき私は

羞恥を感じるのだつた。しかし私はこれらの風物に陶醉しながらも、光がたわむれ鵜が餌をひろつてゐるこの眼の前の流れが汚濁そのものであることは十分知つてゐるのだつた。人々をすし詰めに満載して鐵橋を渡る省線の轟音やオーバーの襟を立てていても容赦なく沁み込んで来る夕風の冷たさも十分知つてゐるのだつた。だがこのような事は私の直面してゐる眞實に關して居れば居るだけ、私の陶醉を深めるだけなのだつた。そうして蒸汽がやつて来るまでそこに立ちつくしてゐるのだつた。

やがて蒸汽は客船を曳きオルガンの一音を吹き鳴らしながら近付いて来るのだつた。それは白く塗り立ててあるので、私をまるで汽船に乗つて遠い國にでも出かけるような夢にふと誘うのだつた。船は乗客が私ひとりであることを見てとつても、とまらなければならぬのだつた。船は一點信號とともにスクリュウの激しい混濁音を立て水を泡立てながら、何とかして不自由な身體を船着場へ寄せようとするのだつた。私はそれが見て居られなくなつて、そしてまた一人の乗客のためにわざわざ停船しなければならぬのが氣の毒になつてまだ船ばたとは大分距離があつても勢よく水の上を跳んで乗り移るのだつた。すると船はほつとしたように二つの澄んだ鐘の音の合圖とともに出發するのだつた。しかし私の船には客は私以外ひとりも乗つてゐないのだ。そして最終の船らしく船室の床と云わずデッキと云わず清らかに洗い流されていて、その濡れた板の色に船の靜寂が沁みついてゐるのだつた。寒くても私はデッキのベンチへ腰を下すのだ。曳船となつてゐる私の船は機關の動搖を傳へることもなくただ靜に流れの上を走つて行くのだつた。眼を閉じて居ればこの船が動いてゐるかどうかも判らないくらい靜に。間もなく一人の老人が船室の屋根のあたりに繩で結びつけてあつた黄色いすり切れた旗を取り外しはじめるのだ。それは最終の信號旗であつて、次に停るところが終點であるこの船は、もう誰に信號する必要もなくなつたのだ。老人はこの旗を巻いて片附けるとゆつくり私のところ

へやつて来て私から切符を受けとるのだつた。そのとき彼は何かを考へる風に首をかたむけてあらぬ方を眺めながら、口の中でぶつぶつ何か呟くのだつた。それは決してありがとうという言葉でもなければ、彼の考えを呟いているのでもないのだつた。客船のなかで彼と私が二人きりで、しかも向き合ねばならなくなつたことが瞬間彼に堪えがたいのだつた。切符を受取ると彼は私からほんの二三歩の距離の舵につくのだ。そうして彼は放心したような無表情な顔で寒そうに船のすすむ方向をぼんやり見守っているのだつた。私はこの老人がどんなに話ざらいか知っているのだ。彼の眼はいつも臆病そうにうるんでいて、ふと乗客の視線と合うようなことがあるといち早く自分の方で眼をそらせてしまふことも知っているのだ。だから私は老人と言葉を交さなければならぬ機会をつとめて避けながら、ただ無言で、兩岸の家々を眺めたり流れにただよっているものへ眼をとめたりしているのだつた。たそがれとともにひどく冷え込んで来た強い風が、老人の不器用に着つけたまるでずり落ちそうを感じのするだぶだぶのカーキのズボンをふるわせると、老人は舵を握つたまま益々背を曲げて行くのだつた。その無帽のために一層寒そうに見える毛のうすい老人の姿がその風とともに私の心に沁み込んで来るのだつた。

しかし私はいつも最終のただひとりの乗客ではなかつた。ときたまいろんな人と乗合させることもあるのだつた。私はあの事務所にひとりとなつて通勤の時間にやや自由を得るようになってからこの船を利用しはじめたのだが、それ以来乗合させた人々を殆んど覚えていたのだつた。あるときは四十ぐらいの女だつた。きちんと髪を束ねたやや蒼白い顔の女だつた。その顔には倦怠や虚無の表情が沁みついていて、そのせいいかどことなく水商賣の女であることが感じられるのだつた。そのときは霧がほのかに河面から生れ、その母胎から去りがたげに流れの上に低くただよいながらスクリーンのつくる深いうねりにゆらゆら揺れたかと思うと散つて行く季節だつた。

そのときはまた兩岸の家々の窓や障子がとざされるようになってから間もないころだつた。私はその女の首筋にふと大きな黒子の^{黒子}ような肉腫を見つけたのだつた。それは熟しはじめた桑の實のようで、まるで首にばつたり乳首を持つているような感じだつた。それは彼女の鮮かすぎる印しとなつていた。その印しの故に彼女は客達からたやすく覚えられ、また彼女を愛する者はその印しへ愛撫の手を伸ばしてたわむれ、彼女を憎むものはそれへ激しい侮蔑の視線をあげせかけたことであらう。そして彼女の全存在は、遂にはその一個の肉腫でしかなくなり、彼女が自分を意識するといふことはただその印しへの意識を意味するといふことだけとなつたに違いない。この彼女を人と違わせている印しはいつかきつと彼女に堪えがたくなり彼女は醫者へ出かけて切取つたことがあるのだつた。しかしそれにもかかわらずそれは彼女の運命のようにそこに再び生じて来たのだつた。あるときは愛され、あるときは憎まれるただそれだけのために。しかし彼女は自分がそのような肉腫であるといふことが堪えがたく淋しいのだつた。——しかし私の眼の前の彼女はただぼんやりと動きを眺めているのだつた。そして私が彼女の首に氣付いているといふことを知っているのだつた。彼女は遂にそのように私の眼へ彼女の印しをさらしていることに堪えられなくなり、ふいにぎこちない伸びをする、着物の襟を正すようにしながら私の方へ向き直つたのだつた。そして一瞬ちらりと私を見た彼女のまなざしのなかには鋭い切なる非難が光つていた。だが次の瞬間眼を落しながら他へ身體を向けてその印しを私の眼からかくすと、袂から眼も覚めるように蒼い蜜柑を探り當てるようにしてとり出して来たのだつた。そして皮を器用にむきすててその可愛いほど小さい袋を口にふくんだのだつた。その刹那、ふいにその酸っぱさが私の口の中にひろがり身體中をふるわせるほど沁み渡つて、私はどうしてもちつとして居られなくなり、ただ動くそれだけのために立上ると、ひつそりした船室のなかへ何となく彼女を避けて行つたのだ

た。

またあるときは一人の老人だつた。色の褪せた紺の背廣を着てちよこなんと茶褐色の中折帽をかむつている小柄なひからびた男だつた。彼はひとり船室のなかへ腰をおろし、生れて以來歩きつづけて来たようなひび割れてつぎはぎだらけになつた黒靴を行儀よく床の上にそろえていたのだつた。その靴の上へだらしなく垂れ下つている黒い靴下と裾のつばまつた短いズボンとの間に枯草色の折れそうな向う歸を寒々とのぞかせながら。彼はその膝の上に使い古した大きな赤革の折靴をもつていた。そして彼が所在なくその折靴をひらいて薄よぐれた書類のまくれ上つた端々を指で丁寧に撫でながら伸ばしはじめたとき、私はそれらの書類のほとんどが特許願に關したものであることを知つたのだつた。老人はきつと發明家だつたのだ。恐らく今日までいろんな無駄な願書を出しつづけている永遠の發明家だつたのだ。だが彼はふと氣付いたように靴の脇へ手を入れて何か貴重な品物でも入つているような眞白な半紙包みを取り出して來ると、それを掌の上に載せて丁寧にひらいたのだつた。するとそれは青い羽根に艶を失つている目白の屍體だつた。白い紙の上に針金のように伸びた脚が黒々と痛々しかつた。やがて彼はそれを再び包み直し窓から手を差出しながらぼとりと流れの上へ落したのだつた。彼はきつとどこか侘びしい庭のない自分の家から出かけるとき、今朝死んでいた彼の小鳥を半紙に包んで持つて出て來たのだつた。しかし街のどこに小鳥を葬るにふさわしい土が見つかるだろう。そして彼は彼の用事にかまけていつの間にか靴のなかの憐れな屍體を忘れてしまひ、今はじめてそれを思い出して水葬を思ひついたのでろう。私の傍に坐つていたその時のもう一人の乗客であつた子供を背負つた女は、この不意の水葬に氣付いてはつとしたように流れの上にあたよう眞白な紙包を眺めたのだつた。それは波に揺られながら勢よく後へ取残されて行き、やがて波のうねりの彼方に見えなくなつてしまつたのだつた。女は驚いたような顔をして老人の方をちら

りと見た。だが老人はもうそのとき、裏に特許局という大きな文字の黒々と印刷してある封筒のなかから、一枚きりの折目も眞新しい紙片を取り出して陶酔的なゆるんだ顔で眺めていたのだつた。幾度確めて見ても飽きないというように。しかしそれは特許證書ではなく公告の通知書に過ぎないのだつた。女は裏切られたような興ざめた顔になり、老人が葬つた自分の小鳥へ少しも感傷をもつてやらなかつたことを非難するように遙か後の方を振り返りながら流れの上を眺めるのだつた。いろんなものただよつて行く黒い汚れた流れの上を……。

またあるときは若い男女であつた。二人はデッキのベンチへならびながら、二人の間に何か氣まずいことがあつたらしく他人のようにならずと押しだまつているのだつた。この戀人同士らしい二人は、わざわざ乗物を蒸汽にえらんで淺草へ遊びに出かけるつもりであつたのだらうに、彼等はどう何かを楽しむ氣分をすつかり失つてしまつているのだつた。青年はどこか軍需會社の工員らしく白いマークの入つた戦闘帽をかむつていたが、収入のよい熟練工なのかそれとも他から餘分な金の入る道があるのか、彼の身につけているものは總てに於て一番を目指しているどこかの野蠻な國のようにあらゆるものが贅澤なものだつた。思い切り豪華な眞新しいオーバーやその下に覗いている仕立上つたばかりのような背廣や、革手袋や靴や、ズボンの折目のくずれるのを氣にしてたくし上げているために見える縞の靴下までも今どき珍らしい高級品なのだつた。しかしそれらの品物はそれぞれに於て立派なものでありながら、それを統一するあるものが缺けているために何か猥雑で、見ているものをすぐ疲らせてしまふのだつた。それに神經の硬化を感じさせるうるおいのない表情や細い暗い一重瞼の眼などが彼の血と魂の汚濁を感じさせるのだつた。しかし彼はひどく意氣込んでいて連れの女を輕蔑し去つていた。ほんの一時彼は女の方を威嚇的な眼で眺めるときがあつた。だが女はひたすらにうつむいていて。そしてときどき指を眼に

もつて行くのだつた。女は十八か九の血の薄いどこか貧しげな女だつた。彼女はあの洗いざらしした羽織とは不似合な、派手な銀の刺繍のある真紅で重そうなショールをかけていたが、その瘠せた肩はそのショールの重さにすつかり打ひしがれてしまつていようように低く落ちてゐるのだつた。そのショールは恐らく青年の贈物なのであらう。だが青年は先刻から自分の選んだこの沈黙にすつかり退屈し切つてゐたのだつた。始終身體を落着なく動かしてゐたが、やがて煙草をとり出しボケットというボケットを探しはじめたのだつた。女は傍の青年の氣配にはつとしたような顔を上げ、青年の指の間にある兩切煙草を見つけると、手垢のなじんだ布のハンドバッグから燐寸を取り出したのだつた。青年は一瞬、そうだ、お前に預けてゐたのだつたというような顔をした。だが次の瞬間、自分の欲するものは彼女に云いつけさえすればよかつたのに自分で自分の用を足そうなんて何て不見識なことをしたのだらうという自意識に傷いて、彼はその燐寸を受取らうとはしないでただ黙つてじつと見据えてゐるばかりなのであつた。すると女は自分の義務の懈怠を責められたような怯えた色になり、うろたえながら燐寸の棒を出して火をつけようとするのだつた。しかし發火した瞬間デッキの強い風に吹き消されてしまつたのだ。彼女は再び風に背をむけ手で蔽いながら燐寸をつけようとするのだつた。彼はその彼女の不器用な手元をいらだたしい嫌惡を見せながら見つめていたが、ふとこの默劇を眺めてゐる私に氣が付くと、あわてて指の煙草を惜しげもなく投げすてて踏みにじり、彼女のように立上つて、軸の欄干の方へ逃れるように去つて行つたのだつた。彼女は徒らに燃える軸木を両手にかこんだまま、その彼の後姿を途方に暮れたように見送つてゐた。だが突然彼女は驚いたように右手を激しく振つたのだつた。そして掌のひらを片方の拇指でしきりに強くこすりはじめたのだつた。軸木の燃えさしが落ちて掌を焼いたのだつた。だが彼女はあの火傷の部分を強く壓した

り揉んだりして摩擦しながら、そのたびに受けるさまざまな痛覺へ次第に沈潜して行くようだつた。彼女はもう指を眼にもつて行くこともなく眼のうるみさえ乾いて、傍の私も軸に素氣なく立つてゐる青年さえも打忘れてひとりその痛覺を楽しんでゐるのだつた。いや、正しくはその小さなしかし鋭い痛覺に耐えることによつて、彼女の肉體の新鮮な生命感を引出してゐるのだつた。彼女は自分の生きてゐるということを今更のように感じ、その感じにすつかり陶醉してゐるのだつた。私にはそれがよく判るのだつた。しかし、しかし、このような體驗は彼女にとつては何事もなく過ぎ去つてしまふであらう！

私の心には私と乗合わせたこれらの人々のいくつもの姿がくつきりと痛いほど沁みつてゐるのだつた。あるときは靴下のない少年の紫色の唇が、あるときは揺れないからと云つて病院からこの船で歸つて行く瀕死の病人の掛けた蒲團から大きく突出してゐた紙のような足のうらが。これらの影が一切私の心に落ちかかり、その暗さの故に明るい雲の上の光を、あらゆる絶望を押しながして行く永遠の生命を愛するのだつた。全くただひとりの乗客のときは私は身に沁む強い風に身體をふるわせてゐるばかりなのだ。だが私は船底を押し上げてゐる、まるで何かの肉體に乗つてゐるような弾力のある力をいつも船底を通して感じてゐるのだつた。それが流れだつた。いかに信實によつて醜く汚れて居ようとも、その流れの内容となつてゐる水は一切の生命の根源なのだ。私は水にひかれ流れにひかれ、よし船のくぐり抜けて行く三つの橋から誰が冷嘲をもつて私を見下して居ようとも、船底を通じて感じられる重々しい力を愛せずには居られないのだつた。そうして私は雷門の船着場から佯びしいアムートに歸つて行くのだつた。今日の一日を振返つてはその思い出に強く耐えながら。

深夜の酒宴

一

朝、僕は雨でも降っているような音で眼が覚めるのだ。雨はたしかに大降りなのである。それはスレート^{スレート}の屋根から、朝の鈍い光線を含みながら素早く樋へすべり落ち、そして樋の破れた端から溜^溜となつて大地の石の上に音高く跳ねかえつて沫^沫をあげているように感じられる。しかもその水の單調な連續音はいつ果てるともなく續いているのだ。ただこの雨だれの音にはどこか空虚なところがある。僕が三十年間經驗し親しんで來た雨だれの音には、微妙な輕やかな限らない變化があり、それがかえつて何か重い實質的なものを感じさせるのだが、この雨だれの音はただ單調で暗いのだ。それはそれが當然なのであつて、この雨だれの音は、このアパートの炊事場から流れ出した下水が運河の石崖へ跳ねかえりながら落ちて行く音なのだ。

だが僕は、このアパートへ來て半年餘りになるが、朝眼を覺すと、それが下水の音であると知つていながら、どうしても雨が降っているような氣分から脱することが出來ないのだ。それほど僕のいるこのアパートには、あの雨降りの陰氣な調子が建物全體に沁みわたつていのである。この建物は兩國の運河沿いに焼け残つたただ一つの倉庫なのだ。このあたり一面の焼け跡には、バラックがあちらこちらに建っているのだが、その手輕な建物とは對照的に、この

建物は現實のように重く無政府主義の旗のように黒く感じられるのである。運送業をしていた僕の伯父が持つていたもので、それを伯父が終戦後アパートに改造したものである。

全く部屋にいと、井戸の底にいろようなのである。僕の部屋は四疊なのだが、押入も戸棚もない。そして天井が思い切り高いのだ。ただ一つの明りが、手が届かないほど高い小窓からやつと部屋のなかに流れ込んでいただけなので、晝間でも薄暗い。しかもその二尺四方の小窓には、驚いたことには、鐵の格子がはまつているのだ。勿論、倉庫時代の窓をそのまま轉用しただけなのである。兩方を隣の部屋と區切っている板壁でも眞新しければ幾分薄暗さが救われるのだが、それが強制疎開のときの取りこわし材なので何とも救いようがないのだ。そしていつも冷々したかび臭い空氣がよどんでいて、それが着物を通して僕の肌に沁み込んでいたので、この間も街を歩いているときに、ふと冷蔵庫の扉をあけたときのような臭いを自分の肌感じて憂鬱になつたことさえあつた。しかも濕氣がひどかつた。寢るときに布團の襟が首にあたるとひやりとして不快だつた。ときには原因不明の腐敗した糊味^{糊味}のような臭いがその濕氣にまじつて襲いかかり、どうにも堪えられないときさえあるのだ。ことに一日中ほんとに雨に降りこめられているときは、僕は全く息づまりそうになる。刑務所にいたときでさえ、僕は窓から雨のしぶきを胸に吸い、高い塀の赤煉瓦が雨に濡れてわずかに赤味を残した醜い泥色に變つて行くのを意味深く眺めることが出來た。春になれば、鐵格子と鐵網越だが、塀際の乙女椿の咲いているのを見ることも出來た。だがここでは僕はただ部屋のなかをうろろするだけなのだ。どこから外を眺めることが出来るだろう！二尺四方の鐵格子の窓は手を伸しても届かないのだ。僕は最初のあいだ氣が狂いそうになつて、窓というものがあるとすればここになければならないと、そのあたりを思いさます手が痛くなるほどだった。僕は普通でない特殊を忘むからだ。だが殘念なことにその外壁だけはコンク

リートで出来ているので、ただ僕の手や骨が空虚に鳴るだけなのだ。そのときはきつと刑務所の病棟に半年近く入れられていた狂気が再發しそうな豫感に襲われ、已むなく高い板壁に凭れて坐り込みながら、ひっそり雨を聴いているより仕方がないのだつた。だが今は僕は組きのせられた鯉こいよりもおとなしい。風が吹くのが雨が降ろうが黒い運河に舟が通ろうが、ただひっそり高い板壁に凭たれているだけなのである。その板壁の僕の頭のある部分には、頭の脂が黒い染みになつて沁み込んでいる。

僕は元來臆病なのだが、それだからまた陽氣なことが好きなのだ。誰かが僕に親しく話しかけて呉れたならば、その人と楽しく笑い合うことも出来ると信じている。だが、僕が昔共產黨員であつてしかも在獄中氣が狂つたという理由によつて、アパートの人々は僕の顔やひとり言を薄氣味惡そうにしているだけなのだ。勿論人々は僕と挨拶は交して呉れる。ことに今日はという挨拶やお天氣の話などは、挨拶のなかで一番重要な深い意味をもっているのだから、僕はそれだけで至極満足している。金融措置令きんゆうちしづせいがどうなるうが、食糧の配給が遅れようが、そのような話題は僕の一番無意味な話題だ。この點に於て僕は十分形而上學者の資格があるのである。だから今晩米がないと訴えられても僕にはどうしようもない。どうしようもないから憂鬱になつてだまつているより仕方がないのだ。だが人々はその僕を冷酷だと考えて、そこにまた僕の過去を結びつけているらしいのである。

このアパートの人々は僕には古くさい昔話の人々のような氣がしてならない。自然主義リアリズムとかいう小説を背讀んだことがあるが、そのように平凡で古くさくて退屈で、それだからその人々の生活を考えただけで陶酔たうすいのない氣分になることが出来る。たとえば僕の右隣の部屋には那珂なという荷扱夫の一家が住んでいる。その妻は四十五六の身なりを構わない女だが、十年も喘息をわずらつていて、最近餘り堪えがたいので醫者に見て貰つたら、胃も悪く心

臓も悪く肺も悪いということだつた。しかし彼女は寢ても居られず一日中ごそごそ立働いているのだ。彼女のいつはだけいている胸には鎖骨がとび出していて、肋骨の數えられる青黄色い薄い胸板には、しなびた袋が醜くぶら下つていのである。そして彼女はのはだけた胸へ手を入れて始終ばりばり掻いているのだが、それが何かの蟲がいるようでひどく不潔な感じがするのだ。その上咳をしては、ところきらず痰をはくので、肺患かも知れないし第一何だかきたならしいからというので、このアパートの隣組の人々は配給物に手を觸れられるのを防ぐために、彼女の病身を言い立て氣の毒を理由として配給の當番を免除しているのである。

那珂の妻は、いつも困つたような泣くような聲でゆつくり話すのだつた。その話は夫と十四になるひとり息子に對する愚痴に盡きていた。その言葉の調子は、まるで瀕死の病人が遺言でもするような大儀な哀れつばさに満ちていて、それが息子への口小言となると、文字通り一日中續いているのだつた。子供が口返答するときはその聲は高まり、そうでないときはいつの間にか夫への愚痴になり、それを子供相手に繰り返しているのだつた。彼女はいつも自分の言葉に涙を流すことの出来る他愛のない感傷性を夥しくもつていた。彼女は其の夫故にその息子故に、世界中で一番不幸な人間だつた。そのためにまた人々から輕蔑されるのだつた。そして彼女はこう言つては涙を流すのだつた。全くこのような感傷性は我慢がならないものだ。

彼女はアパートの人々に對しても同じ調子だつた。彼女は會う人毎に愚痴るので、彼女の家庭の内情はすつかりアパート中に知れ渡つていた。彼女の夫は竊盜の前科が二犯もあつた。そして彼は家族に菜つ葉だけの雑炊を食へさせても自分は米の飯を食わないと承知しないのだつた。殊に三人家族一日分の配給のパンを一度に平げて、そのために自分たちは一日何も食へることが出来なかつたというのが、このごろ一番多く繰り返される彼女の愚痴なのだつた。し

かもその子には子供らしい盜癖があつて、繪本を持つて行つたと誰かが苦情を言いに來ると、いつもの困つたような泣くような聲で、「全くあの子には呆れてゐるんですよ。わたしのいうことなんか一つもきかないし、ねえ、お神さん、うちの子はどうしてあんなんでしよう？ それに何しろうちの人の兄弟は、みんな手癖が悪いんだよ、あの子もうちの人の方の血に似たんですよ。……」

と物憂さそうに訴えるのだつた。そして愚痴がはじまり、夫や夫の兄弟のために自分はいかに肩身のせまい思いをしているかということは何時間も話しつづけるのだつた。しまいは苦情に來た相手は自分の目的などはどうでもよくなり、彼女を慰める自分の言葉に疲れ果てながら引下つて來るのだつた。彼女には自分の苦痛が大切なのであつて、他人のそれは少しも感じないのだ。だがそのように愚痴る彼女自身も、今迄に幾度となく、炊事場に置き忘れてあるようなものをだまつて持つて歸つて來てゐるのだつた。

僕の左隣りにゐる人々も僕にはやはり重い。書くのも大儀なくらいだ。戸田という夫婦が住んでゐるのだ。その妻のおぎんは僕の伯父の仙三を助けて、管理人と女中の役目を果してゐるのだ。彼女は三十を半ば過ぎていたが、左の眼のあたりが何か脹れてゐる感じで、そのためにふと顔が歪んで見えるのである。彼女は勝氣で働き者だ。廊下を掃いたり、やもめの仙三の身の回りの世話をしたり、アパートの配給から菜園の入手まで引受けながら、その上夫の面倒まで引構えてゐるのだ。彼女がアパートの人々を無作法に呼びつけるのは、このような疲労も原因因してゐるのである。

だがこのように忙しいおぎんでありながら、隣組の配給やアパートの用事で部屋部屋を訪れるたびに、大抵一部屋で十分も二十分も話し込んでゐるのだ。それにはそれ相當の利益があるのだ、つまりいろんな話を聞き込んで闇取引をする機會があるのだ。いろんな品物を手に入れたり賣り捌いたりする機會があるのだ。だからこのアパートでは彼女が一番裕福であるかも知れない。アパートの人々

は、彼女が餘りえらそうにしていると云つて好感を持つて居なかつたが、面と向うと彼女には頭が上らないのだつた。

だが夫の戸田も自分の妻のおぎんには全く頭が上らないのである。戸田はおぎんより五つも年下であるせいか、おぎんには奴隸のように服従していた。彼は謄寫版原紙に製版する仕事をしていたが、二三日机の前で鑪の音をさせていたかと思うと、すぐ倦怠を感じらしく、映畫を見に行くのだつた。だから一月を通ずると、割のいい仕事なのにその収入は家計費の半ばにも達しないのである。

おぎんはアパートの人々の人に知られたくない秘密にも通じていて、人々の弱點に少しの容赦もないのだが、おぎんの一番我慢のならないのは、男の生活的な無能力だつた。それでいながら戸田に對する態度はそれと矛盾して、かえつて戸田の責任のない非實際的な性格を愛してゐるようなのだつた。若しこれが他の男であつたら、それが誰であらうと臆面もなく、「あんたはだらしがらないのね。それではお神さんが可哀そうだ。」とやつつけずには居られなかつたであらう。また彼女にはたしかにそれだけの資格があつた。彼女は立派に家計を支えていたばかりでなく、將來のために貯金までしていた。彼女はバラックでもない店を建てて昔のミルクホールのようなものがやりたいのだつた。戸田がこの妻に對して頭の上らないのは當然だつた。事實戸田のその妻に對する態度は、罪人が裁判官に對するようだつた。彼は始終自分の非實際的な性格を呪つていた。しかしどうすることも出来ないのだつた。

永らくこのアパートにゐる人でも、戸田の顔を知つてゐる人は少かつた。彼はいつも部屋の隅にひきこもつていて、机の前で鑪に鐵筆の軋る鋭い音を立てながら仕事してゐるか、寝ころんでぼんやり空想してゐるのだつた。彼はアパートの人々に會うのを極度に恐れていた。便所へ行くにも廊下の人の氣配をうかがつてゐる有様だつた。だがたまに人に會うと、うろたえた挨拶をどもり臆病そうに眼を伏せてそそくさとその人から離れるのである。その戸田は全く自

分を生きて行く價值のある人間だとは少しも思つていないようだった。それはまるで全世界の人々の非難を一身に負うていようだった。

疲れたつつけんどんな聲で人々の名を呼びながら、配給を事務所へとりに来るように傳えているおぎんの聲を聞いていると、僕はいつも深い絶望的な氣分に襲われるのだ。また隣から聞える那珂の妻の鋭い連續的な咳や、泥棒のように緊張した顔で廊下を便所へ急いでいる戸田に接すると、僕はまるで永劫の前に立たされたような憂愁に陥るのである。だが僕の部屋と向き合っている部屋にいる深尾加代という若い女だけは全く堪え難いのだ。どんな不幸でさえも彼女に印をつけることは不可能であろう。僕はその女の鼻にかかる甘えるようなそれでいてどこか遠い聲を聞いていると、いつも重苦しい嘔吐おうとのような氣分を感じるのである。

おぎんは加代に愛想を盡かしていた。女學校を出ているのに配給の當番のときは必ずと言つていぐらに計算を間違えておぎんや皆に迷惑をかけるのだつた。そして若い男がいつも入りびたつていてあたり構わない笑聲が聞えていたし、配給物を受取る金さえないときが多いのに、いつも牛肉を煮る匂いをさせているのだつた。加代がこのアパートに來たのは仙三の關係からだつた。加代の母は仙三の妾めかけをしてゐたことがあるのである。

加代はまだ二十なのだが、彼女は十八で最初の男を知つたのだ。

それは戦時中、女學校の挺身隊で城東の皮革工場に行つてゐるとき、その工員と出來合つたのだ。間もなくその關係を先生に知られて軍需省へ勤務を變更させられ、敗戦までそこにいた。空襲のために仙三が焼け出されたので、彼女の母は石川へ疎開することになった。そのとき加代は辭職を申出たが、課長は自分の家から通う方がいいと言つて辭職を許さなかつたのだ。課長は家族を疎開させて、かなり大きな家にただひとり住んでゐた。

加代は敗戦後もその課長の家にいた。だがある日課長は、家族が

疎開先から歸つて來るからと言つて、僅かの手切金で石川の母のところへ行けというのだ。加代はそのとき素直に肯いたが、田舎へ疎開した母は親戚の強制的な勧めと生活難から中農の隠居へ再婚して居り、その婚家へ行くことは、彼女に想いも及ばなかつた。彼女は汽車の切符を買いに行くと言つて家を出た。そして何の當もなく新宿や銀座をさまよつた。そして日が暮れてから、彼女は母の旦那であつた仙三を思い出したのだ。すると彼女は今朝家を出るときから、心ひそかにこの仙三を當にしていたことに氣付いた。彼女は新宿から省線に乗ると、ぼんやり仙三の家に近い兩國で降りた。仙三は折好く元の住所にブラックを建てて住んでゐた。仙三は加代を見ると眉をしかめたが、それでも彼女を自分のアパートに入れてやつたのである。

アパートへ來てからの加代は、自分の部屋に落ちついてゐたことはなかつた。加代にはいつも未來への漠然とした不安があつた。彼女はその不安をただ漠然と堪えているだけなのだ。それは彼女の眼を見ればよく判るのだ。彼女の重臉おもてがはは何かひどく重い感じだつた。そしてその瞳には動物的な暗さが沁みついてゐた。だが、頬から口元にかけては幼女のようにあどけないのである。恐らく彼女が老婆になつてもこのあどけなさだけは保たれるだろうと思われるのである。それだからこの顔全體は、不思議に人々を追憶的な氣分にさそうのだつた。彼女の客が、殆んど二十前後の青年であることを、その顔が誘惑的なのだということが判るのである。

加代の最初の客はこうだつた。ある夕暮、彼女は兩國の驛にぼんやり立つてゐた。彼女は何かを待つてゐた。しかし何を待つてゐるのか自分でも判らなかつたのである。いろんな男たちが彼女を振り返つた。ことに學生服を着て眞新しい赤革の手提鞆をもつた青年が、長い間彼女を見入つてゐた。そして彼女がその青年に氣付くと、青年はふいに顔を赤らめながら、まるでひきつけられるように加代へ近付くと、

「あの、みつ豆でも食べませんか？」

となつかしそうに言うのだつた。それは九州から上京して來た醫學士だつた。今でも彼は自分ひとりで時には友だちを連れて加代のところへ來るようである。

僕は何のためにこの手記を書きはじめたのだろう。このアパートの人々の生活や氣分と言つたものを記録しようとしているのであるうか？ 或いは一切が古くさい昔話と變らないということを證據立てようとしているのであらうか？ いや、これらの人々は僕に深い絶望を與えるのである。僕の心のなかにある或る憧憬を救いようのない絶望に陥れるのだ。だがそれが却つて今の僕には快い。僕は自分の絶望を愛しはじめてゐるのである。勿論その愛は憂鬱だ、だが憂鬱という奴は、夜寢床へ入るときのような樂しさを與えて呉れるのである。

僕には思い出もない。輝かしい希望もない。ただ現在が堪えがたいだけである。現在が堪えがたいからと言つて、希望のない者には改善など思いがけないことだ。一體何をどう改善するのか。欲望という奴は常に現實の後から來る癖に、影だけは僕たちの前に落ちてゐるので、その影にだまされて死ぬまで走りつづけるような大儀なことはしたくないだけなのである。だから僕をニヒリストだと思われるのは至極道理だ。だが僕の世界中で一番きらいなものはこのニヒリストという奴なのである。ニヒリストと聞いただけで加代に感ずるような嘔吐を催すのである。僕を強いて差別づけるとすれば——僕はまた、この差別という仕事が大嫌いなのだが——ニヒリストと正反對のものである。勿論、ニヒリストの反對はローマンチストではない。その名前は誰かが考へて呉れるであらう。僕はただ堪えがたい現在に堪えてゐるだけなのである。

二

僕は今日も重い刷毛^{はけ}を背負いながら、銀座の露店からこの本所の

一割に歸つて來た。僕は自分の格好を名譽なものとは考へてゐない。罹災したとき着てゐたのだという仙三のよれよれの國民服を着てゐるのは、それより外に着るものがないからだ。その上に古典的な泥棒然とした大風呂敷を背負つて歩いてゐる僕の姿は、とかく人目をひくらしく、付近のバラックの人々もいつとはなしに僕の名を覺えてしまつてゐるくらいだ。そんな格好でゆるゆる歸つて來ると、珍らしくまだ暗くならないのにアパートから引上げて來る伯父の仙三に出會つたのである。

仙三は背廣姿で、僕に氣が付かず歩いて來るのだ。彼はひどい跛^{びこ}だつた。だが彼の頭丈な肩や、それにつづいてゐる厚い抑揚のない一枚板のような上半身は、彼の昔の商賣を思い出させるのである。彼は仲仕から叩きあげて運送店の主人となり、戦時の企業整備のとき、このあたりの小運送店を合同してその社長にさえたつたのだ。だが、今は、この倉庫が一つ焼け残つたきりだつた。しかも彼はその空襲のとき、家や妻だけでなく、右足を足首から失つたのである。

アパートのあたり一面の焼跡には、思い思ひのバラックが建つてゐる。それはこのたそがれには、移民の集團住宅のような猥雑と疲勞が強く感じられるのである。仙三はその間を運河沿いに橋の方へ歩いて來るのだ。それは歩くというよりよろめいてゐるという方がふさわしかつた。跛の方の足がやつと大地に踏み下されると、彼の上半身は倒れんばかりに右へ傾き、それを節くれだつた太い木の杖で懸命に支えながら左の方の脚をひきつけるのだが、そのためにしばらく立止つてゐなければならぬのだつた。その都度に、杖がぶるぶるふるえてゐるのである。そして彼は不安そうに、次の足を下さなければならぬ地面をちらりと確めてから、再び運命的な豫感のうちに、次の一歩が絶望的に踏み出されるのだつた。僕はその老人に挨拶をした。

「早いお歸りですな。品物の清算は明日にしますか？」